



マーシャル方面遺族会  
 (旧クエゼリン方面戦没者遺族会)  
 郵便番号 154  
 世田谷区野沢 3-11-3  
 電話 東京 (421) 3614  
 振替口座東京 93487 番  
 編集兼発行人 浮田信家

人の心の誠、英霊に通ず

靖国神社権宮司 池田良八

明治天皇御製

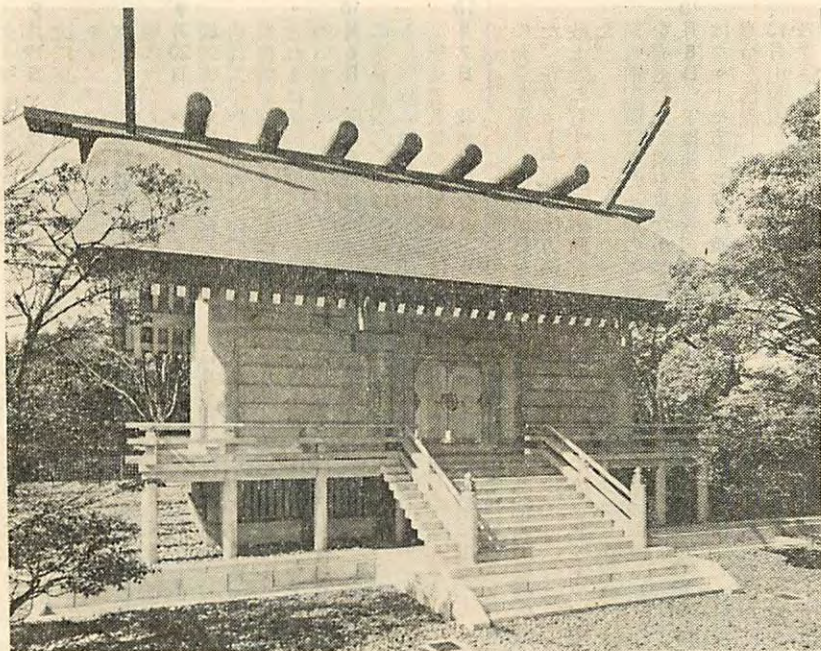
目に見えぬ神の心に通ふこそ  
 ひとの心のまことなりけれ

皆様の遺族会とは、去る昭和三十八年六月二十九日に、クエゼリン方面戦没者遺族会として発足し、名誉会長に元宮朝香鳩彦様を迎へ、会長に林茂清様が推されました。発会に至るまで、常任幹事の浮田信家佐藤宗丕両氏が戦没者や遺族の調査、その他発会に至る諸準備の為に献身的ご尽力を致されたことは皆様のご存じの通りであります。そして翌三十九年二月六日に靖国神社の大前で、クエゼリン島戦没者二十年祭が厳かに行はれました。四十年一月一日には、機関誌「環礁」の第一号が発行されました。遺族会発足当時はクエゼリン島のみでありましたが、その後対象をマーシャル諸島、ギルバート諸島全域に及び、四十一年にマーシャル方面遺族会と改称されました。三十九年二月六日に二十年祭が行はれましたが、その後は毎年二月六日に会長以下多数のご遺族関係者が靖国神社に集って恒例として慰霊祭を行はれ本日に至っています。参列者も年々多くなっています。又本会の大事業であります慰霊碑建立は「環礁」第十三号にあるように、幾多困難な情況下、終に米国の了解を得、本会関係者一同の献身的努力と好意のもとに、立派な忠魂碑が出来上り、鄭重に浄書された霊躰簿を添へて、昭和四十三年十二月一日、現地司令官指揮のもとに、クエゼリン島に無事に建立されました。写真で見れば非常に立派なもので、英霊もさぞ喜ばれたことと思います。

当初奉掲の御製の通り、「目に見えぬ英霊」に關係者一同の「まことの心」が通じたものと感激に堪えません。

靖国神社霊躰簿奉安殿

昭和四十四年御創立百年事業として  
 御本殿背後に建立された。



(原版靖国神社より貸下)

目次

人の心の誠、英霊に通ず

池田良八……………(1)

タラワ島戦記……………(2)

タラワ海戦25周年記念式典に

参列して 武部 和正……………(4)

ルオット島侵攻作戦回顧録

ケース、ウイリアムス……………(5)

クエゼリン慰霊碑便り……………(6)

タラワ、マキン玉碎英霊を弔う……………(7)

続・忠魂慰霊碑建立縁起……………(8)

弔 詩……………(8)

マーシャルの交通……………(10)

本年二月六日の慰霊祭・定期

総会・直会旅行……………(11)

二月六日の想い出……………(11)

第7期決算報告と

昭和46年度予算……………(12)

寄附者芳名……………(13)

事務局便り……………(16)

# タラワ島戦記

## マーシャル方面遺族会編

### 一、まえがき

この戦記を御読み下さる方は、はじめに本誌第9号マキン戦史をもう一度御目通し下さい。

### 二、柴崎司令官の着任

昭和17年8月米潜水艦の奇襲のあとしばらく敵来襲の兆なく、わが方の戦備工事は妨害なくすすめられた。18年春以来は、当方面の防備強化のため、逐次兵力や資材の補給が行われた。

しかし敵潜水艦の跳梁と我艦船の不足等のため、予定された陸軍部隊のギルバート諸島への進出は中止となり、又防備、築城用の資材、兵器等も予定輸送量に達せず糧食さえも充分ではなかった。

このような状況の下に、昭和18年7月柴崎恵次海軍少将が第三特別根拠地隊司令官としてタラワに着任し、ギルバート諸島方面部隊の指揮をとることとなった。

柴崎司令官は着任するや、直ちに軍規の振肅と訓練の励行に着手した。かくて同司令官の着任から敵の来攻までの四ヶ月の訓練で、守備部隊は著しく精強の度を加え自信に満ちあふれて来た。

### 三、我が防備兵力

敵の同島来攻時のタラワ島の我防備の概要は次のとおりであった  
防備兵力

第三特別根拠地隊司令部及び同隊陸戦隊員の大部約一五〇〇名  
佐世保第七特別陸戦隊 約一二〇〇名  
第七五五海軍航空隊派遣基地員 約三〇〇名

### 第一一海軍設営隊の大部

合計 約二〇〇〇名  
防禦兵器 約四七三〇名

- 二〇〇機砲 二門
- 一四〇機砲 四門
- 八機砲 六門
- 一二、七機高角砲 四門
- 七機高角砲 四門
- 二五機銃 二〇門
- 一三機銃 一二門
- 一五〇機探照灯 一基

### 四、中部太平洋の戦局動く

9月1日 米機動部隊南島島に來襲

9月8日 タラワ島及びナウル島飛行場から陸攻10機がナヌメア島の爆撃を行った

(註ナヌメア島はタラワ島の南五〇〇哩、エリス諸島の一島)

9月18日 第22航空戦隊は陸攻7機、軽爆14機、戦闘機12機をタラワ島に集中、ミレ島、タロア島にもそれぞれ陸攻、軽爆を進出待機せしめる発令をした。

(註・タロア島は環礁8号3頁のとおりマロエラップ環礁中の一島)

9月19日 敵機動部隊は基地大型機と協同し、タラワに対し三次に亘り延一五〇機の攻撃を行った。同日マキン、アバマ、ナウル等も空襲を受けた。

9月19日 敵機動部隊タラワに三次に亘り、延一五〇機来襲、マキン、アバマ、ナウル等も空襲を受けたが彼我海上兵力の交戦には至らず、敵は退去した。

9月20日 タラワ島に対する大型機20機の攻撃を受けた。

中部太平洋方面においても敵の積極的意図のあることは略判断されるに至った。

10月6日 敵機動部隊ウエーキ島に來襲延四〇〇機の空襲を受けると同時に敵艦一隻、巡洋艦及び駆逐艦数隻の砲撃を受ける。

10月7日 我索敵機はウエーキ島の30度一〇〇哩に輸送航10隻の発見を報告した後消息を絶つた。在ウエーキ島の味方部隊は敵上陸に対する邀撃準備を行った。

同日前記確認のため別の索敵機を發進したが敵を見なかった。

10月8日 午後連合艦隊司令長官はウエーキ方面邀撃作戦部署の発令を解除した。

10月中旬頃から再び敵機動部隊のウエーキ方面に來襲の気配が濃厚となったので

10月14日 内南洋部隊指揮官は第一警戒配備を發令したが、

10月16日 午後には連合艦隊司令長官から「無線諜報により敵機動部隊來襲の算大である。ウエーキ、マーシャル方面は邀撃作戦配備につけ」と發令され

た。

10月17日 機動部隊はじめ所在部隊ブラウン島に向けトラック発

10月24日 機動部隊はウエーキ島に向い東方北方海面を索敵したが敵情を得ず。

10月26日 連合艦隊はウエーキ島方面の邀撃作戦配備を解除した

10月28日 連合艦隊司令長官は第十一航空艦隊に南東方面進出を下命

11月1日 午前5時ブーゲンビル島西岸タロキナ岬に護衛艦9隻を伴う輸送船18隻をもって、敵は上陸を開始した。

11月5・8・11・12・16日 ブーゲンビル島沖航空戦

11月11日13日 我航空部隊エリス所在敵航空基地フナフチ、ナヌメアの空襲を行う。

敵は直ちに反撃に出て

11月14日 以降18日までタラワ島に対し連日基地大型機の空襲にやつて来た。

11月18日にはマロエラップ環礁、ミレ環礁、タラワ環礁は、大型機の來襲を受けた。

### 五 敵攻撃目標タラワに決す

11月19日 午前2時から4時までナウル島に艦上機(戦闘機、爆撃機一〇四機來襲。又午前4時10分我索敵機は同島の一九五度60哩に敵艦一隻、航空母艦一隻、巡洋艦一隻發見、針路90度速力25節と報じた。

午前8時から30分間更に同島に戦闘機、爆撃機計40機が來襲。正午すぎには敵、爆計45機の襲撃を受けた。同島ではこの日敵機5機は撃墜したが、味方の損

害も大きかった。

またこの日は午前七時にヤルト島にB24が10機つづいてB241機が來襲した。

また午前8時55分にはB24が1機マキンに來襲した。

さてタラワ島ではこの日午前2時30分から4時45分までの間に艦上機(戦闘機、爆撃機)延一五〇機、5時から6時までに戦闘機、爆撃機連合延一八〇機、午前7時25分から戦爆延二八〇機、7時45分にはB24が8機とひききりなしの來襲があった。

更につづけて午前10時から40分間に亘り戦爆延三〇〇機の來襲があった。従って同島は当日延九一八機に及ぶ猛烈な銃爆撃を受けた。早朝來敵機31機(内8機不確実)は撃墜したが、味方にも戦死9名、重傷26名という大きな被害があった。

同日午前10時敵機動部隊索敵攻撃のため、陸攻25機發進、午後4時30分頃陸攻3機は敵空母を發見。電撃の結果空母一隻轟沈せしめたが自爆未帰艦4機。

正午我索敵機の報告による敵情一タラワ南方海面に空母三、戦艦一、巡洋艦5、駆逐艦3及び空母1、戦艦1、巡洋艦一駆逐艦1の機動部隊2群あり

二 アバマの東方10哩に駆逐速力25節の1群あり

同日 連合艦隊司令長官は北東方面より千島防備に必要なものを除く陸攻37機をトラックに進出せしむ。

六、十一月二十日の戦闘

11月20日午前2時30分 空母2、  
 巡洋艦4、駆逐艦2タラワの南  
 10哩針路北、速力20節  
 午後2時55分タラワに敵機来襲  
 開始  
 午後2時15分迄に三次に亘り、  
 延艦上機一九〇機、B 24 30機  
 来襲、撃墜23機(内不確実5)  
 午前3時15分マキンに敵機来襲  
 開始、午後2時55分迄に七次に  
 亘り延艦上機二六六機来襲、撃  
 墜12機(内不確実4機)  
 午前3時5分ヤルト環礁に敵  
 艦上機来襲  
 午前3時20分ミレ環礁に敵機来  
 襲開始。午前10時55分迄6次に  
 亘り艦上機二四三機来襲  
 午前8時15分より10時22分迄巡  
 洋艦3、駆逐艦2タラワ砲撃、  
 午前10時20分タラワの北東一三  
 〇哩に敵艦1、巡洋艦2、駆逐  
 艦2発見  
 午前10時30分敵機陸攻4機午  
 前時11攻撃機陸攻15機発進せ  
 るも戦果不明、未帰還陸攻10機  
 午後2時30分巡洋艦1輸送船3  
 マキンの南東70哩に発見。針路  
 三〇〇度速力25節  
 かくて20日タラワ島は早朝来極  
 めて多数機の連続猛空襲の外、  
 多数艦艇による猛烈な艦砲射撃  
 が反覆された。

以上の攻撃によってタラワ環  
 礁の主島ベチオ島の飛行場は使  
 用不能に陥り、人員の死傷、防  
 備施設、兵器弾薬等の破壊、炎  
 上、糧食の損失等守備部隊の、  
 戦闘力に重大の損害を受けたが  
 守備部隊の士気は毫も衰える

ことなく、益々旺盛となった。  
 (註) 米側の公式報告に依れば  
 米軍上陸前の砲撃に依って、  
 陸上重砲火を沈黙させ殆んど総  
 ての陸上建築物を破壊し且つ所  
 在兵力の約半数を倒したが、な  
 お壱塚、特火点、対爆掩体の一  
 部は破壊されずに残存し之に依  
 って日本軍は頑強な抵抗を行い  
 米軍の死傷は甚大であったと述  
 べている。

七、十一月二十一日の戦闘

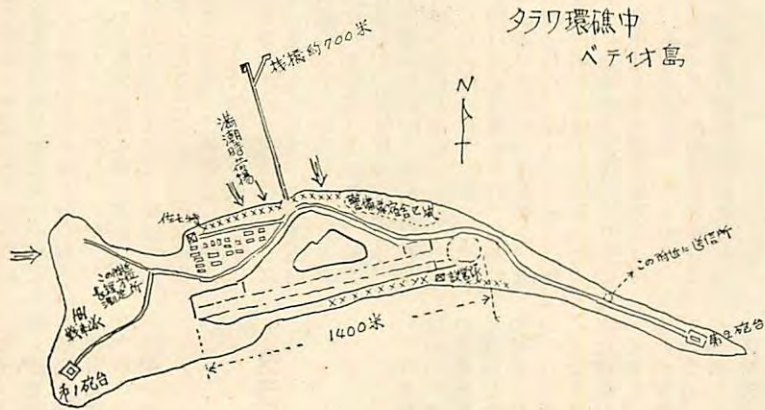
11月21日 午前0時10分タラワの  
 北西約18キロに、敵艦1隻、巡  
 洋艦3隻及び駆逐艦6隻に護衛  
 された十数隻の敵輸送船団を発  
 見した。

午前2時から敵機はタラワ  
 に対し艦砲射撃を開始し、我が  
 砲台は之に応戦した。  
 午前2時27分タラワに敵艦1  
 隻、空母1隻、巡洋艦3隻、駆  
 逐艦6隻及び輸送船十数隻から  
 なる攻略部隊がベチオ島西方海  
 岸に近接、2時59分最初の上陸  
 を開始した。

このときの我が  
 陸上防備兵力の配  
 備は概ね上図のと  
 おりであった。

第一回の上陸は  
 ベチオ島北岸大棧  
 橋の両側付近及び  
 同島の北西端付近  
 に対し水陸両用戦  
 車、上陸用舟艇合  
 計約二〇〇隻をも  
 って行われ、その  
 殆は撃破したが、  
 その他は上陸する  
 に至った。わが所  
 在部隊は、この敵  
 の邀撃、東、南、  
 西の三方面から包  
 囲大棧橋付近に圧  
 迫対峙激戦を展開  
 した。

一方午前3時マ  
 キンにも駆逐艦1  
 隻、輸送船3隻来  
 攻、上陸を開始、  
 守備隊は之と交戦  
 来敵は上陸部隊の



窮状打開のため午前3時10分か  
 ら艦上機を以て、午前4時25分  
 から艦砲をもつて、砲撃を反  
 覆し、その猛烈爆撃下にタラワ  
 湾口掃海の後大型駆逐艦又は巡  
 洋艦及び舟艇約二〇〇隻を環礁  
 内に進入せしめた。  
 午前4時30分マキン守備隊の  
 無線通信連絡が杜絶した。  
 午前6時30分大型駆逐艦又は  
 巡洋艦3隻、駆逐艦又は掃海艇  
 4隻の援護下に水陸両用戦車約  
 一〇〇隻、舟艇二〇〇隻を以て  
 ベチオ島北岸一帯に接岸、上陸  
 を実施し、我守備隊と対峙、激  
 戦を展開した。

この頃「タラワの南東50哩に  
 タラワ上陸部隊の後続輸送部隊  
 又は別働隊と思われる巡洋艦3  
 隻、駆逐艦1隻、輸送艦3隻あ  
 り」との情報、午前8時には  
 「タラワの南東40哩に、空母  
 2、戦艦2、巡洋艦2、駆逐艦  
 1針路二九〇度、速力12節」と  
 という情報も入った。何れもタラ  
 ワを目指す部隊である。  
 又午前8時25分ナウル島にB  
 24、戦闘機32機来襲、8時30分  
 にはマキンの南東30哩に空母3  
 隻、駆逐艦2隻発見」との情報  
 があり、午前10時45分にはオー  
 シャン島にB 24が1機来襲した  
 とか11時15分には敵艦上機17機  
 ヤルト島に來襲、銃爆撃を受  
 けつつありとの情報もあった。

この間午前9時17分には触接  
 機、陸攻2機、10時1分攻撃隊  
 陸攻14機発進、攻撃目標タラワ  
 附近敵艦船。  
 戦果、空母1隻、輸送船1隻撃

沈未帰還9機との情報もあった  
 正午約五〇〇名(全兵力の  
 約半)大棧橋附近に揚陸我守備  
 隊は之を包圍攻撃した。  
 正午頃敵艦砲が司令部防空壕  
 に命中し、柴崎司令官以下幕僚  
 の殆んど全員が戦死するに至っ  
 た。

このように我が統帥中樞が破  
 壊せられ、指揮連絡思うに任せ  
 ん状況になつても、我軍の士気  
 は毫も衰えず、予て定められた  
 部署に従つて、各隊は所定の攻  
 撃行動を遂行して、終日敵を圧  
 迫した。

午後0時15分にミレ島に戦爆  
 計一〇〇機来襲、被害戦死10の  
 報あり又午後2時35分の敵信に  
 よれば、敵上陸軍指揮官は後続  
 部隊に上陸を下令した。  
 午後10時以後は、夜襲を執行  
 し敵に出血を強要した。  
 午後11時伊号第35潜水艦は、  
 タラワの南西70哩に空母を含む  
 大部隊を発見。之を攻撃しよう  
 としたが、制圧されて目的を達  
 せず。

八、十一月二十二日の戦闘

11月22日 午前1時5分陸攻10機  
 タラワ島敵側陣地の爆撃の結果  
 北棧橋附近一ヶ所火災発生す、  
 味方陣地に糧食四〇〇疋投下す、  
 午前1時30分陸攻1機タラワ  
 偵察、彼我の対峙線不明  
 午前3時5分以降午前8時迄  
 にミレ島に敵艦上機80機、大型  
 機18機来襲  
 未明更に敵は予備兵力を上陸  
 せしめ、又先に北西端に上陸し  
 た部隊が、西岸一帯を占領する

に至った。なお環湖内には駆逐艦4隻、輸送船5隻、環礁外に戦艦1隻、巡洋艦1隻が出現し小舟艇をもつて、資材、人員の揚陸をはじめた。

午前7時26分以降午後2時30分迄にナウル島にB24が16機ナウル島に來襲

午後12時30分ミレに小型機9機來襲  
午後1時30分タラワは左の報告を最後とし爾後無線連絡は壮絶した。

「飛行機及び艦艇の砲撃の支援下に輸送船を逐次港内に入泊せしめ人員・資材を引続き揚陸。棧橋を通ずる南北線附近で彼我対峙中」

タラワ環礁内の東及び北の諸島にも見張員各、約15名が配備されてあったが、11月21日敵の上陸によって全員戦死した。

九、タラワ遂に玉碎す

ヘンリー・エ・ショー著「タラワ」の信頼性の程度はさだかでないがその記録するところをたどつてみるとタラワ攻略に当つた米第二海兵師団長スミス少将は師団指揮所をベチオ島にうつすこととし、22日午前11時55分その西岸に上陸した。

午後後の攻撃は、いままでの二日間にくらべると、めざましいといつてもいい位だったが指揮所内の雰囲気はいかかわらず冷感だった日本軍の防禦施設を一つずつ破壊してゆくカタツムリのようにおそい速度の作戦テンポと、それにひきかえ海兵隊の受けた極めて大きな損害のために、緊張で消耗し

た兵の間に、悲観とあきらめに似た微妙な雰囲気があった。始めたスミス師団長の午後4時の報告にそのムードが反映していた。

「ベチオ島を迅速に掃討するためには状況は有望ならず。将校の死傷者甚大なるため、兵力統制は困難をきたしあり。依然として強力な抵抗地区は飛行場の東端なり。

島の東端の多くの掩体は、いまだ何等処理されあらず。わが陣地内の前線の西方にある多くの日本軍拠点はいまだ弱体化されず、前進は遅々とし、犠牲極めて大なり。完全占領のためには少くとも更に五日間を必要とせん」

それ以後敵の戦車によって、我が陣地は逐次蚕食せられ、翌23日には島の東部の一部を除き、敵に蹂躪せられ、24日には遂に全島が敵の占領下に陥するに至つた。

タラワ全環礁所在我が兵力四七〇〇名中殆んど全部が戦死又は自決し、敵の捕虜となつたものは、一四六名であつたが其の大部分は設営隊所属の朝鮮人労働者であつた。

タラワに上陸した米海兵隊は、一八、六〇〇名と称せられ、日本軍守備兵の四、七〇〇名の約四倍またマキン上陸の米陸軍部隊は、六、四七二名で、日本陸隊隊三八四名に対し約二三倍であつた。

又タラワ上陸の米軍部隊の被害は戦死九九三名、戦傷二、二九六名と記されてある。

大本営は、約一ヶ月後タラワ、マキン両島の玉碎を次のように発表した。

「タラワ」島並に「マキン」島守備ノ帝國海軍陸戦隊ハ11月21日

以來三、〇〇〇ノ寡兵ヲ以テ五万余ノ敵上陸軍ヲ邀撃、熾烈執拗ナル敵機ノ銃爆撃並ニ艦砲射撃ニ抗シ連日奮戦、我ニ数倍スル大損害ヲ与ヘツツ敵ノ有力ナル機動部隊ヲ誘引シテ友軍ノ海空戦ニ至大ノ

タラワ海戦25周年記念式典に参列して

寄與ヲナシ、11月25日最後ノ突撃ヲ敢行全員玉碎セリ  
指揮官ハ海軍少将柴崎惠次ナリ  
尚兩島ニ於テ守備部隊ニ終始協力奮戦セシ軍属一、五〇〇名モ亦全員玉碎セリ

武 部 和 正

グアム島出港後米海軍沿岸警備隊からミサイル実験のためコースの変更を要請されたため、やむなく迂回したため約一日おくれ、昭和43年11月23日未明タラワ島に接近した。僅かに水平線上に這いつくばるように、全く起伏のない平坦な環礁の島々が点々と視界に入つて来た。ベチオ島錫地には小型客船が数隻と米軍艦が一隻在泊していたが、これらの船の灯火やイルミネーションが美しくあつた。

7時30分先案内が乗船し、棧橋から一漣附近に投錨した。小型ランチで検疫官や税関吏、商社の代理店員など乗船した。荷役は8時から開始した。

当日は幸運にもタラワ海戦25周年記念式典の最終日に当り午前9時から海岸の一角に準備された式場で記念碑の除幕式があつた。

当地政庁からこの式典に公式訪問者として二名参列されたい旨案内があつたので末永船長と私の二名が日本代表として出席した。

これより先代理店支配人には箱入りの日本人形を贈つたが長官に

機銃陣地が、砲弾の痕もあらわに殆んど当時のまま放置されてあつた。米海兵隊が敵前上陸した海岸(遠浅の為干潮時は数百米も潮が引く)には点々と飛行機や上陸用舟艇の残骸が散在していた。

長官主催の昼食会への出席を辞退して帰船した。当日は土曜日で式典最終日のため二、三の商店以外は全部休みで、原住民の大半は岸壁にたむろし、碇泊中の米軍艦見物のため荷役用の艇を待っていた。当夜は最後の催しで、島をあげてのダンスパーティーがあると聞いたが、残念乍ら、荷役も午後5時半に終わったので、直ちに出港となつた。

大和海運船フイジー丸

(九頁五段より続く)

あとがき

本誌11号に山藤茂様(8頁)から、会津若松市の遺骨伝達式と云き配布された弔詩は、御本人が満州従軍中片時も忘れず、全文を暗誦しておられた由です。ブラウン島で戦死された弟さんの行動が歌になつたよう思われたのでしよう。この記事をご覧になつた東京の鮫島みさを様から、その年の12月に「39年に亡くなりました母の貴重品入れの小箱にありましたものを頂いて帰りました。この慰霊祭の話は引揚後母から聞きました。今読み返しても万感胸に迫つて涙で文字がかすみます。いつの日か環礁の貴重な頁の一部をさいて頂けたらと思ひブラウン島の御遺族の方々の當時を偲ぶ思い出のよすがにもとお送りいたします」と。

# ルオット島侵攻作戦回顧録

ケイス、エス、ウイリアムス

私は昭和19年1月米海軍上等兵曹として、太平洋艦隊航空部隊に所属していました。その隊は中部太平洋の航空前進基地において通信及びレーダーによる見張、哨戒を主任務とっていました。

私の隊は昭和19年1月22日一隻のLST(註・戦車揚陸艦で、現在日本の自衛隊に三隻保有しています。何れも米国から貸与されたもので排水量は約一七〇〇トン)に乗り込みハワイの真珠湾を出港しました。このLSTはマインシャル攻略艦隊の一艦で、出港二日後に目的地はクエゼリン環礁北端のルオット島であることを知らされました。

私達はルオット島の日本守備部隊が反撃してくることを予想して気がすすみませんでした。事実はんの二ヶ月前のタラワ、マキン占領作戦のとき、味方に如何に多くの被害があったかを思い出しても心配でした。ルオットでも多くの戦友が戦死をし負傷をするであろうと案じました。確かにルオットでの日本軍の反撃は、タラワの場合より遙かに頑強でした。

ルオットの日本守備隊は第61警備隊、第四施設部分遣隊、第23航空戦隊の一部、第24航空戦隊、第28一、七五二及び七五三各海軍航空隊並びに多くの分遣隊で、およそ三、五〇〇名が駐屯していました。終期には朝鮮人労務者40名

を含む91名しか生存していませんでした。米軍は二万名が参加し、うち七四〇名が戦死又は戦傷死しました。

私ははじめてルオット島を見たのは、1月31日の朝でした。私達の艦はクエゼリン環礁に北東の方角から近づいていました。同島は米軍の艦艇及び航空機による砲撃を受けていました。そういえば大部前から水平線に低く横たわった島を覆う大きな黒い煙のような雲が見えていました。艦はルオットの北側を西航し、更に外礁に沿って南西に廻って北水道からクエゼリンの礁湖に入りました。

31日の午後から漂泊し、翌朝ルオットの南二漣に投錨しました。翌2月1日早朝第四海兵隊は小型上陸用舟艇に分乗し、海岸に向いました。同日正午過ぎ私達のLSTは錨をあげ、重トラック、無線兵器、レーダー部品陸揚のため海岸につき込みました。彼等の戦闘は激しくつづけられており、米海兵隊は深く侵攻できず、私等も海岸にとどまっていたまま日本軍の小銃や機関銃にさらされました。この激戦も夜に入ってから終り、この島を占領できました。ただルオットに連なるニムル島では翌2日の午後まで戦闘がつづきました。

1日の午後重兵器を島の北端に移すのは大変困難な作業でした。島は破壊物で一ぱいでした。地

面は破片や弾丸による穴が幾重にも重なり、重トラックの行進を妨げました。死体が一面でした。米軍の打ち込んだ無数の不発弾や砲弾が散乱しており、いつ爆発するとも知れず大変危険でした。

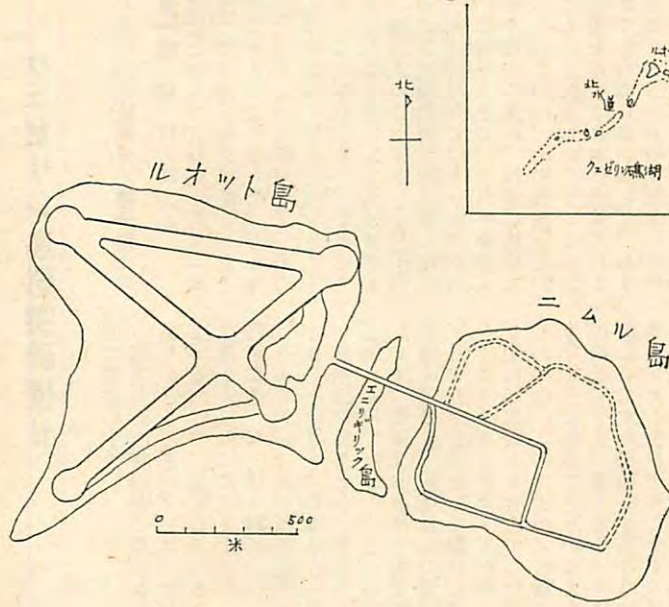
やっと島の北東端の滑走路附近にたどりついたとき、コンクリート陣地の中から日本軍の抵抗を受け釘づけされました。日本軍は私達に発砲し、手榴弾攻撃をはじめました。そのとき米海兵隊が援護に来てくれ、コンクリート陣地攻

撃のため、陣地に近寄り、強力な爆薬を仕掛けました。待つ間に爆破の準備を終えたと見る途端、すさまじい爆発、爆音そして煙と埃が空中に舞い上りました。しかし煙はおさまっても、陣地は立っており、一見損害を受けていないようでした。でも私は日本軍は陣地の中で気絶したり、爆死していると思いましたが、やはり海兵隊がドアーを破壊し、中に入ったところ日本警備隊は全員戦死していたことを知りました。

それから北岸を西に向って進み監視所を造り、索敵レーダーや戦闘機誘導レーダーそして無線通信装置を据えつけました。

その晩私達のルオットでの最初の晩は何とも不気味な一夜でした。地面は死体や肉片で覆われていました。私のすぐ近くの狭い壕には一五〇名位の日本海軍々人の死体が横たわっていました。その人達は明らかに捕虜になったり、やむなく敗れることよりも、自決を選んだのだと思われました。暗くなる直前、私は日本の水兵の横たわるすぐそばに腰を下し、携帯糧食で夕食をとりました。その時私はすっかり疲労し、空腹にせめられていました。私は食事しながらこの死んでいる日本の青年の横顔を見てかわいそうでなりませんでした。この人と私が、このような状態以外の所で会っていたのだらうと深く思いました。その晩私達も疲れ切ってはいませんが眠れませんでした。

そこから東数百ヤードのニムル地区では小銃、機関銃、臼砲の銃砲声が聞こえていました。日本の哨戒機が頭上を飛んでいました。結局何にも落されませんでした。日本の飛行機に攻撃されるのではないかと戦々競々一夜でした。暗くなって間もなく不思議な出来事が起きました。海兵隊の一員が、自分のたこ壺の中で、幻の敵に向って小銃を打ちました。この事が数分のうちに恐怖をもたらした米兵の殆んど全員が四方八方に小銃や機関銃をうちまくりました。この射撃は制止されるまで、何の





アップ(三万四千円)ミリ(二万五千円)位となりました。

○第四信 46・4・20

永い間御無沙汰しました。日本もお花見や旅行など、今が酣。さぞ日本国中賑わっていることと思えます。当地相変うずの暑さですが、四月に入ってから多多く、長らく悩んだ水枯れもやっと解きました。実は三月初めから徳原はホルホルの病院で右腕神経故障のため手術を受けました。心配なので私も同行しました。幸い経過良好で、四月二日島に戻り、五日から軽作業ながら仕事に復帰しました。思いがけずホルホルで短い休暇が過世命の洗濯ができました。

十日の土曜日クエゼリンでパーティーがあり、その折久しぶりにミラー司令官にお目にかかりました。

八月九日に当地の勤務が終り、朝鮮に転勤とのことです。任務の期間は聞きませんでした。その後本国の学校へ行く予定なので、その途中、必ず、今度こそ日本へ伺へるとのことでした。そのときは浮田さんにお知らせするから、よろしくとのことです。クエゼリンを離れてしまえば、墓地のこととは無関係の人となってしまうかもしれません。もしミラーさんが日本へ行かれたときにはよろしくお願ひします。

すが、同時に私達、外国人の就職が次第にむつかしくなってきました。そんなわけで、私達も、間もなく、此処を引揚げる必要にせまられることと思ひ、そろそろその準備をしなければなりません。早ければこの秋頃、おそくとも来月二・三月頃迄には何とか、結論が出ると思ひます。そうなれば日本行も当分延びてしまふのではないかとそれが残念です。

○第五信 46・5・16

徳原はお蔭様で大変よく、もう仕事にも差支えありませんが、大事をとって、今月末頃まで軽作業をさせて頂くことになっていませう。徳原が沖繩先祖の墓地のことでは是非行かなければならない用事がありますので、多分十一月初旬十日ほど休暇をとって行く事になると思ひます。その途中都合で、一兩日日本へ寄るようになるかも知れませんが、その節はよろしくお願ひします。

○第六信 46・6・8

今年もまたメモリアル、デー(五月三十日)がやって参りました。昨日私共は福福さんと一しょに墓参致しました。しばらく意欲がなくなって、昨日の墓参は本当に久方振りでした。もうすでに参拝して下さった人があって、墓前にはみづみづしいアンテリウム(ハワイ特産の花)や野生の花などが美しく活けてありました。私達は花は持つておりましたが、ビールやコーラなどをお供えし、お線香を上げてお参りました。無用の人の往来がありません。いか、いつ行ってもチリツ落ちておらず、掃除したのでように、

すがすがしくなっています。丁度雨上りで、墓石もしっとりとしており暑さも一休みといったところでした。

タラワ、マキン玉砕英霊を弔う

去る四月一日発売された「タラワ」(ヘンリー、アイ、ショウ著)の訳者宇都宮直賢氏は「上海事変以来精強をうたわれていた日本陸戦隊はタラワでその戦闘力を遺憾なく發揮された。特に米海兵隊が上陸日に日本軍の好守備により水際で死傷者の山を築いた時に、マインシャル、トラックの日本海軍の出撃が実施されたら、タラワの勇戦は見事に実を結んだであろうこの海兵隊は、その後サイパン、沖繩と戦ったが彼等はどの戦域でもタラワほど恐ろしい激戦はなかったと云っている。タラワで76時間死闘の後玉砕した日本陸戦隊の猛勇振は世界戦史上稀にみるもので、皆さんと共に心からその英霊を慰めたい」と結んでいます。マキンに四月カ月、タラワに十カ月勤務して敵の上陸一カ月前に転勤命令で横須賀に帰還した私ですが、堅い珊瑚礁をハンマーで砕いて、土囊にし陣地を構築したことや、月明の夜間空襲の物凄さ又敵上陸に備えて努力した事でも憶いの限界を越えて努力した事でも憶い出され、深夜睡眠中幾度か飛起

ました。来年春頃には何とかして日本をお訪ねしたいと言つて居られました。とりあえず墓参のお知らせをいたしました。皆様によるしくお伝え下さい。

二、中田 勇様 46・5・28

この度うちの家内が病氣したのでハワイに一寸帰りました。4月

藤 平 直 忠

きて英霊に合掌し平静な気持を取戻すのに大変でした。昨年十月頃厚生省で来年度はマインシャル及びギルバート方面の遺骨収集を実施するやに聞いたので担当課長に面接し、政府集骨団の案内役をした旨申入れました。然しこの場合も相手国の承認はじめ渡航手続は自ら行い、旅費は自弁の原則を聞かされましたが、玉砕のため戦友会の設立が出来ないことと、戦後十年近く戦犯として巣鴨に服役した私は残念乍ら、経済的余裕もなく、現職すら捨て難い境遇なので、勤務のかたわら関係各部を廻り出来る限りの努力をしてみました。

そして昨年末本会を訪ね浮田副会長と面接し長時間遺族会設立以來八年に及ぶ御苦心を承り身の程も知らず実行しようとした自らの浅薄に気がつきました。それでもなお仲々諦められず、数少い縁故者を求めて、協力を頼んでみましたが結局去る三月中旬厚生省担当課長との間で、今後一切政府にお願いすることに決しました。厚生省側の要旨は次の通り

27日から5月17日までハワイで暮りました。やはり南洋の方が気がらくに暮されまますからいいと思ひます。いつもお墓をとると心の中でお祈りをしています。そうして太平洋で戦死した英霊をお祈りしています。

続 マーシャル諸島 戦歿者忠魂慰霊碑縁起

第六章 慰霊碑のデザイン

鷹 本 初 太 郎

マーシャル方面遺族会から、戦歿者慰霊碑の設計について、御相談を受けましたので種々検討して見ました。何しろ当初の遺族会の構想は相当大きなもので、鉄筋を骨にしたコンクリート造りでした。然し慰霊碑としては現石の方が適當ではないかということになり、始めからの目論見である全国各都道府県の銘石を集め、大体日本各略図の形に当て嵌める事にしたため、慰霊碑としては特殊のもので出来上ったわけですが、

今日まで沖縄はじめ各地の慰霊碑を沢山見ましたが、近頃は比較的コンクリート製が多い様ですがしかし碑と云うと、洋の東西を問はず、現石の方が圧倒的に多いようです。

ヨーロッパ各地での墓地も見て回りましたが、コンクリートの墓碑は見当りませんでした。簡単ですが慰霊碑の設計についての感想を申し上げます。

これには東京の第一石材工業株式会社及び茨城県船田の友常石材工業株式会社の献身的な努力が実を結んで御覧の様な立派なものが出来上った次第です。大きさは、

第十三章 慰霊碑建立に寄せて

金 子 英 郎

十一月になっても清水中尉は着任されません。ソロモン方面は連日激闘が続き連合軍はジリジリと進攻を続けておりますが、マーシャル方面の戦線は小康を保っております。

十一月の半ば頃、「敵、機動部隊、マーシャル、ギルバート方面接近の公算大なり、警戒を厳にせよ。」との情報が入りました。八〇二空では早速哨戒線を六〇〇浬

弔 詩

おくやみのし

謹みて英魂に捧げまつる。

明治天皇御製  
あらはさんときは来にけり武士が  
ときし剣の 清き光を

1 大命を奉じまつりて今こそは  
必勝撃滅の意気高く  
卿等が勇躍置く霜の  
白き朝をいでたゞし  
波頭蹴立てて堂々と  
船団直路南進す

2 出航初夜の夜半すぎ  
突如護衛艦の爆雷轟き  
既に敵潜水艦は真近しと  
情報入れば將兵は  
非常の配備忽ちに  
動ずることのあるべきや  
鏖闘鏖闘相衝み  
大海原を押し征く  
鋭こころ燃えし緊張の  
一夜まささきく明け渡り  
さゆらぐ金波の彼方より  
さし出づる陽光をうち仰ぎ  
將兵一同交々に  
船路の如何に遠くとも  
など潜難に驚るべき  
目指す任地に行きつきて  
防人の任果さめと  
誓ふ心も新なる  
かゝるうちにもその行手  
我が船団を窺ひて  
敵潜艇に出撃す  
雷撃何ぞ受くべきと  
難路を蛇行し僚船は

3 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

4 襟を正してひとすじに  
祈る祖国の弥栄を  
敵機敵潜襲の  
備えに一分の隙もなく  
氣おひたちたるますら男も  
今船中の新春に  
越え去り過ぎし幾百里  
はるけき家郷偲ぶなる  
ははそは母は如何にや  
老路なる父は幸くや  
はらからは健けくあらむ  
ひとしほに思ふはわが児  
わが立ちし後に生れしと  
いまだ見ぬそのみどり児を  
わが妻はせめてもを  
ひと目なりとも  
わが目には見せまじものを  
ひたすらに念ひあるらむ  
かぎりなき思ひの数を  
戦友どちと偲びかたらふ  
洋の上の新しき年  
たのしひととき  
○月○日潜襲遂に退けて  
目指す任地の○○に  
全員無事に着きにける  
南の果てなる島よ  
一人一人住はぬ島よ  
越後なる佐渡が島にも  
及ばざる小さき島よ  
これやこれわれの任地ぞ  
海抜僅か二米  
まこと絶海の孤島にはあれど  
木々に緑の滴りて  
珊瑚の砂の白けれど  
戯むる波の清くして  
椰子の葉末にそよぐ風  
涼しきまゝに炎帝の  
苦熱もなくて常夢の

5 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

6 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

7 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

8 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

9 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

10 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

11 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

12 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

13 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

14 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

15 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

16 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

17 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

18 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

19 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

20 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

21 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

22 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

23 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

24 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る

25 互に信号うち交し  
或は航路を変更し  
又甲板を激浪が  
洗い流さむばかりなる  
暴風雨と戦ひよもすがら  
灯管の揺もいと敵に  
乗り切り進む海の子ら  
苦難の航行旬余日  
南十字の四つの星  
燦めく夜空明けぬれば  
眼路遙げき洋上に  
島現はれぬほの黒く  
祖国離れて初見なる  
陸にぞあればつはものは  
歎びの手握りしめ  
我等の任地も真近よと  
歓声揚げて励み合ふ  
寄港二日は船団の  
編組積換補給など  
憩ひのいとま更になく  
激しき上陸訓練に  
敵は近しと剣を磨し  
○日再び船上に  
○島向ひいで立ちぬ  
いよよ驍敵跳梁の  
制空海の圏に入る



をし翌未明全機出撃です。一番機が発進しました。続いて二番機が離水中敵艦載機の来襲を受けてしまったのです。後十分で全機発進と云うところを敵の第一波に見舞われたのです。この第一波で一番機を除いて出撃準備中の全機が炎上してしまいました。続いて第二波から陣地、格納庫、兵舎と次々にやられ、第三波、第四波と终日攻撃を受け、敵来襲第一日目で八〇二空では全機喪失してしまつたのです。マキン、タラワには敵上陸中との事です。八〇二航空隊では早速予備機銃や、こわれた飛行艇から機銃を外すやられて、海岸の煙霧に警備隊と協力して陣地構築にかかり、敵の上陸に備えました。翌二十一日も終日空襲です。マキンは玉砕の電信を残し通信が杜絶えました。波打際に地雷代りに爆弾を埋めたり、敵上陸に備えてありとあらゆる防備作業に励みました。翌二十二日タラワ通信が絶えます。私達も敵上陸が今日か明日かと昼夜陣地につききりです。日出から日没迄終日空襲です。連日こんな日が続きました。マキンには敵陸上飛行場建設が進められ小型機の発着が始まつたとか。こんな或夜、確か十一月二十五日の夜であつたと思います。夜半に飛行機の爆音が聞えて来ました。敵機は着水して来ました。味方の二式飛行艇でした。暫くすると取次ぎ伝令が「金子飛曹長、司令がお待ちです。」と陣地迄迎えて来ました。何事かと本部へ参りますと司令が「唯今の飛行艇で清水中尉が着任した。お前はこれから空技

廠へ転動せよ。」との事です。敵の上陸が今日か明日かという時です。私は司令に願ひ出ました。司令、どうか皆と一緒に死なせて下さい。」すると司令は静かに「お前の気持はよく解る。しかし夜が明けるとこの飛行艇は敵機に焼かれてしまふ。内地からはるばる第八〇一空の隊員が新しい飛行艇を持って、応援に来てくれたのだが若い搭乗員で、清水中尉がこれで降りると夜間飛行が寛束無いのだ。後任者が着任したのだからお前はすぐこの飛行艇をクエゼリン迄廻航せよ。それから先は辛便を捜して任地に転動せよ。」私はその場から戦友に退隊の挨拶の暇もなく、後髪を引かれる思いでヤルトを後にし、夜明前にクエゼリンに着きました。それから内地帰りの便を求めてトラック、サイパンを経て、十二月半ば、ようやく横浜航空基地に着きました。早速航空技術廠にかけつけ、実験部の益山少佐の所へ着任の挨拶に参りますと、「お前よく無事で帰れたナア。清水中尉は戦死したよ。」「ハッ?!」私は呆然と声を呑みました。私の退隊後直ちに八〇二空はウォッゼに移動したそうです。そして転進後間もなく空襲であつた温かな加茂司令が戦死され、その時村上主計長も一緒に戦死されたと聞きました。村上主計長は村上会長の御命令です。たとえ命令とはいへ、私は仲間を置き去りにして来たのだ、そして清水中尉は私の替りに戦死したよなものだ。この切ない気持、私は一生この十字架を負う事でしょう。

15

まこと此世の極楽境  
嗚呼さはあれどこの島に  
誰か思はん来る日に  
卿等の墓標樹てんとは  
炎熱長旅船中の  
疲れを医するいとまなく  
昼はひねもす短夜も  
眺かけて揚陸の  
作業なかばに飛電あり  
〇〇風雲急なりと  
尖端進出部隊將兵は  
眦決して発航す  
在島部隊の一同は  
肅然汀に並び立ち  
「海征かば水漬く屍」と高らかにのんども裂けよの歌声は  
波にこだまし風に乗り  
送らるる者 送る者  
固き決意のまなかひに  
声涙下る「万歳」を  
叫びかはして相別る  
持てる糧にも限りあり  
椰子実もあだにはとらずして  
持久の策は講じたり  
時しも乾燥の日は続き  
雨水とても望み得ず  
たのみをかくて堀る井戸も  
塩水にして術もなし  
携行水のドラム缶  
のみ水さえも節しつゝ  
水煙はるか皇国の  
総反撃に立つ日まで  
守り徹さめこの島を  
かゝる頭より来襲の  
敵機は日毎執拗に  
増して盲爆しきりなる  
その跳梁もものはと  
我が善謀と勇戦に

14

この乱戦のさ中にぞ  
飛び来りたる仇弾に  
孤島の土を尽忠の  
血潮に染めて壯烈の  
御身は戦死遂げられし  
悲憤の極み痛哭の  
かへり給はぬいくさ神  
玉ならばかくは砕けむ  
花ならばかくは散れこそ  
一くれの骨もかたみも  
残さずていさぎよし  
日本男子と卿はちりたり  
悠久の大義につきて  
その魂はひさかたの天をし翔  
けり大君の辺にはありけむ  
靖国の神とし生きて  
永久に皇国を  
護りたまはむ  
今国難の風荒れて  
皇国に存亡の  
秋疎りたひたぶるに  
試練の道を耐え忍び  
固たみ挙りて驍敵を  
討ちてしまむ決意こそ  
大和男の子の本懐と  
南海の果にぞ散華せし  
崇き英霊の遺志なれや  
今ぞ国内苛烈なる  
戦の庭となりし日を  
崇き英霊の遺志に  
続きて進み奮いたち  
討ちてしまむ  
勝たておくべき  
明治天皇御製

13

この敵や激しかるとも  
我ならでたれかさえむ  
つはもの猛きころに  
いささかのゆるぎもなく  
剣尖いよいよするどし  
時しもよ敵は〇〇の  
基地の整備も漸くに成れるに  
乗じ大挙南冥の孤島に迫る  
鐵艦を泛べ輕舸を列ね  
飛機以て天を覆い  
鉄板装甲の重圧  
ひた押しに押し迫り  
傍若無に上陸の  
作戦企図にいでんとす  
隱忍自重ひたすらに  
神機倒るを待ちありし  
我が指揮官は

12

この島や小さかるとも  
退かば国危ふし  
この敵や激しかるとも  
我ならでたれかさえむ  
つはもの猛きころに  
いささかのゆるぎもなく  
剣尖いよいよするどし  
時しもよ敵は〇〇の  
基地の整備も漸くに成れるに  
乗じ大挙南冥の孤島に迫る  
鐵艦を泛べ輕舸を列ね  
飛機以て天を覆い  
鉄板装甲の重圧  
ひた押しに押し迫り  
傍若無に上陸の  
作戦企図にいでんとす  
隱忍自重ひたすらに  
神機倒るを待ちありし  
我が指揮官は

19

この敵や激しかるとも  
我ならでたれかさえむ  
つはもの猛きころに  
いささかのゆるぎもなく  
剣尖いよいよするどし  
時しもよ敵は〇〇の  
基地の整備も漸くに成れるに  
乗じ大挙南冥の孤島に迫る  
鐵艦を泛べ輕舸を列ね  
飛機以て天を覆い  
鉄板装甲の重圧  
ひた押しに押し迫り  
傍若無に上陸の  
作戦企図にいでんとす  
隱忍自重ひたすらに  
神機倒るを待ちありし  
我が指揮官は

18

この敵や激しかるとも  
我ならでたれかさえむ  
つはもの猛きころに  
いささかのゆるぎもなく  
剣尖いよいよするどし  
時しもよ敵は〇〇の  
基地の整備も漸くに成れるに  
乗じ大挙南冥の孤島に迫る  
鐵艦を泛べ輕舸を列ね  
飛機以て天を覆い  
鉄板装甲の重圧  
ひた押しに押し迫り  
傍若無に上陸の  
作戦企図にいでんとす  
隱忍自重ひたすらに  
神機倒るを待ちありし  
我が指揮官は

17

この敵や激しかるとも  
我ならでたれかさえむ  
つはもの猛きころに  
いささかのゆるぎもなく  
剣尖いよいよするどし  
時しもよ敵は〇〇の  
基地の整備も漸くに成れるに  
乗じ大挙南冥の孤島に迫る  
鐵艦を泛べ輕舸を列ね  
飛機以て天を覆い  
鉄板装甲の重圧  
ひた押しに押し迫り  
傍若無に上陸の  
作戦企図にいでんとす  
隱忍自重ひたすらに  
神機倒るを待ちありし  
我が指揮官は

16

この敵や激しかるとも  
我ならでたれかさえむ  
つはもの猛きころに  
いささかのゆるぎもなく  
剣尖いよいよするどし  
時しもよ敵は〇〇の  
基地の整備も漸くに成れるに  
乗じ大挙南冥の孤島に迫る  
鐵艦を泛べ輕舸を列ね  
飛機以て天を覆い  
鉄板装甲の重圧  
ひた押しに押し迫り  
傍若無に上陸の  
作戦企図にいでんとす  
隱忍自重ひたすらに  
神機倒るを待ちありし  
我が指揮官は

21

明治天皇御製

この敵や激しかるとも  
我ならでたれかさえむ  
つはもの猛きころに  
いささかのゆるぎもなく  
剣尖いよいよするどし  
時しもよ敵は〇〇の  
基地の整備も漸くに成れるに  
乗じ大挙南冥の孤島に迫る  
鐵艦を泛べ輕舸を列ね  
飛機以て天を覆い  
鉄板装甲の重圧  
ひた押しに押し迫り  
傍若無に上陸の  
作戦企図にいでんとす  
隱忍自重ひたすらに  
神機倒るを待ちありし  
我が指揮官は

20

この敵や激しかるとも  
我ならでたれかさえむ  
つはもの猛きころに  
いささかのゆるぎもなく  
剣尖いよいよするどし  
時しもよ敵は〇〇の  
基地の整備も漸くに成れるに  
乗じ大挙南冥の孤島に迫る  
鐵艦を泛べ輕舸を列ね  
飛機以て天を覆い  
鉄板装甲の重圧  
ひた押しに押し迫り  
傍若無に上陸の  
作戦企図にいでんとす  
隱忍自重ひたすらに  
神機倒るを待ちありし  
我が指揮官は

私は慰霊碑無事建立の報に接し、一入亡き戦友を偲びいさかなりともこの企に参加させて頂くた事をこの上もなく深く感謝致し亦光栄に存して居ります。

### 第十六章 (続)

### 全国各道府県

### からのご寄稿

揮毫された知事ご氏名

銘石 名

県内の関係ご遺族への励まし

沖繩県

揮毫された方

琉球政府行政主席

松岡 政保殿

銘石 名

トラパーテン

大理石の一種で、琉球列島の石灰岩層の一部にあるものは、古くから石材に利用された記録があります。岩質は多孔質ですが膠着度も高く石材として加工すれば、美麗なものは、装飾用として珍重されます。

本部からお詫び

環礁13号の印刷を発註直後に、琉球政府厚生局の援護課長様から頂戴いたしました。既に印刷終了の時点でありましたため追加変更おくれまして深くお詫びいたします。

## マーシャルの交通

佐竹エヌ

度々の慰霊訪問の記事で大体、おわかりになられた事と思われませんが、交通の不便には驚きばかりです。島国ですから船便ということになるのですが、船はラリフクラタフク号(四九〇トン)ミレットビ号(三〇〇トン)ミニエコクイン(二〇〇トン)以上三隻です。それが、日本の北海道九州までより広い地域を廻るのですが別にそれが定期便ではなく、椰子売を集め、米やら衣類、雑貨を売り廻るためのもので何時頃何処を廻るかかわらないのです。マーシャルの人達は自給自足が出来、生活に困る事も無いしお金を残そうとか貯えようとか考えません。私達があくせうしているのを不思議そうに眺めています。船が故障しても修理する事が出来ません。修理部品が漸く届いた頃は修理する人が帰ったとかでミニエコクイン号は私達がマジュロに着く前から故障していたのが漸く修理部品が届いたがとうとう修理が出来ず私達が去るまで動かせませんでした。

ラリックラタタック号は黒い船体です。速力十一ノット、大きき速力共マーシャル一の船です。これで、赤道も越え、タラワ、マキン、オーシャン、ナウル、ウオッチェを廻りました。私は船の事も海洋や天体も何も知りません。横浜から乗船のパンヒックアイランダ号の船長や浮田さんに少しづつ教えて頂き計器類を見て海の深さとか現在地の測定に星を見ての観測等もいくらか解ったつもりでしたが、マーシャルの船は計器も航海長や船長の耳目による風波と一つの感を頼りと思われるばかりです。あの小さな同じような島を間違わないものと驚くばかりです。帰国途中トラック島で日本漁船九八トン船にも計器が一杯ついていて自然に目的地へ行きますよ、色々の免許が必要なのですとの事でした。

マジュロから初めて現地訪問、マロエラップ環礁タロアへの船、ミレットビ号は白いスマートな船ですが速力が六ノットです。動き出したが波も立ちません。湾内だからゆっくりにのんびりかと思っていたが最後速力六ノットでして。日本で現在の船は二ノット以上です。白波も立ちませんゆっくりに

波を上手にさけて飛び降りるので、調子が狂うと海水の中にどんぶり顔までつかれる事もあります。砂浜の時はそれでも何とか出来ますが深いリーフ(環礁)の時は落ちたら船の錨も届かない深さです。船員がボートの下にもぐりリーフにつけて上陸させてくれました。波でボートがリーフに打ち壊されないようにしなければならぬのです。

島には乗り物は殆んどありません。何処へ行くのも勿論徒歩です。小さな島ですが一周するのに一日では廻りきれないものもありました。始めは地図を頼りに、慰霊碑に一番よいと思われれる場所をさがし、慰霊碑を建て慰霊祭を済ましてから、船便の都合が出来る迄、島を外廻海岸づたいに廻り、中央の本部の場所等を廻って来ました。船の行く跡は全部上陸して、日本軍の足跡をたしかめて見ましたが、どんな小さな無人島のような島でも日本軍の戦死者(基地から離れ食糧補給等に來ていて戦死なされた)の遺骨がこの場所に埋葬されると聞かされました。東京出発の時は、靴もハイヒール、運動靴、レイインシューズ等五足とマーシャルではラバソール(海水浴に海浜用のゴムゾリー)が一番便利と聞き、ラバソールも五足づつ、二人で一〇足持って行きました。四ヶ月(六ヶ月で往復二ヶ月は船の中)で五足のラバソール全部履きつくし浮田さんの分は一足買ひ足すようになり、浅草で一足一〇〇円で買ったものがマーシャルでは一・三ドル

(四六八円)他の靴は慰霊祭のための盛装するときだけでした。マジュロには日本製の自動車やオートバイもあり、運転免許も必要ですが、運転が出来ればそれでよいのです。坂もなし曲りくねった道もない前進後退、止める事が出来ればマジュロでは運転出来ます。運転免許証も検査の時五〇セント(一八〇円)払えばすぐ免許証が貰えます。マーシャルの最大都市マジュロだけが電気、自動車のある島ですが、他の島にも、ポツポツ自動車や、オートバイが普及されていくようでした。棧橋のない砂浜への自動車の陸上げも見て来ました。

マジュロ島への飛行機便が一週一日です。島民の殆んどが飛行場に行きます。見送りや、出迎えやらの人もありますが、殆んどの人には遊びのようでした。郵便もこの飛行機です。店も役所も郵便局も飛行機の着く頃は誰もいなくなり用事が出来ません。私達もこれを見てからは飛行場に行く事にしました。飛行場では、一ヶ所で殆んどの人達、長官、副長官、商社社長、郵便局長、船長、警察署長、病院長迄お会いする事が出来るし、私の希望条件もスムーズに運べる社交場でもあるようでした。

### 環礁ミレー抄 (4)

成宮芳三郎

海越えて 敵探照灯の  
さだかなり 高く騰りし  
雲に映えつゝ  
元66警(ミレー)島 軍医長

本年二月六日の

慰霊祭・定期総会・直会旅行

なおらい

恒例の前日九段会館宿泊者、今年は二十名常連の方もあり今年はじめての方もあって賑わいました。特に今年には玉碑の時現地で九死に一生を得た鈴木寅雄さんの苦戦談など固唾を呑んで聞入りました。

二月六日靖国神社での慰霊祭には全国から約二百名の会員それに元海軍中将寺岡謹平殿外十数名の来賓が参集のもと午前十時半から開始しましたが、その後のことは小室舜司郎様の二月六日の想い出で御覧下さい。

なお定期総会では浮田副会長、橋口常任幹事から、昭和45年度の事業報告と決算報告及び昭和46年度の事業計画と予算案の説明がありました。その中

1 副碑を靖国神社に供えることは既に環礁13号で予め御意見を伺い、これに対する回答は大多数が賛同であり、総会では全員御賛同の上遺族の多くは年輩であるから早く製作するよう望まれるものがありました。資金準備の都合もありますので、製作の時機は本部に一任されました。

2 二、三年前から多くの方の御要望のあった本会会員の名簿が出来上りました。

3 会費納入を励行されたこと決算報告の通り、45年度の会費収入38万円即ち七六〇人の会員

が納めて下さっただけです。一方寄付金は89万円もいたしております。従って少数の方の寄付が主となっております。役員一同の努力によって出費を極力節約して運営しておりますが、46年度への繰越一〇四万円弱では今後の運営が著しく困難となります。

右のとおり状態ですので、45年度は勿論46年度会費未納の方はなるべく早く送金下さるよう要望がされました。これに対し年五百円では運営出来ない筈である。年千円に上げては如何という提案があり多数の拍手賛成もありましたが、本部からの説明で現状据置に決定されました。

今年には特に新しい計画はないが会則に遵い地道の運営を行うかたわら副碑製作の具体策を練る事とし、決算、予算と共に、本部提案のとおり決定されました。

マルシャル 遺骨収集(国として) 国としてこの地域の遺骨収集はまだ行っていないので厚生省は本年度予算をとり、実現の計画ですが、現地事情により、どうなるか今のところ定かでない、仄聞致しましたことをお知らせいたします。

拝啓 此の度慰霊祭に参加させて頂き、先づいって本部役員各位の御労苦のほどを感じ、心から御礼申上げるのみでございます。あのような数々の行事の企画から、解散に至るまでの運営本当に並大抵の苦勞でないと思ひ、私達はただ見て、呑んで、食べるだけ、重ね々厚く御礼申し上げるものでございます。

靖国の本殿に昇り、大きな鏡の前で神官の祝詞奏上の折、私は正面に向って正座、ズーツと冥想しているとき、あの荘厳な御扉の奥に沢山の兵隊さんが

2月6日の想い出

ウオッゼ島戦死者の兄 小室 舜 司 郎

その中弟が若い元氣な当時の顔で、さも懐しそうに嬉しそうな笑顔でオオ兄さん来てくれたか、待つて居りましたよとスーと近づいて来るようでした。隣りにおります見知らぬ兵隊さんが貴様のことでは兄さんが、俺のところでは父が来た。またうちでは母だ、わしのところでは妻が来たとみんなそれぞれ嬉しそうな顔であった中に、うちでは来ないんだ。どうしたのかと残念そうな顔も見えるような、いつぞや自分も軍隊に居る頃、家族が面会に来た時の嬉しさ、又来なかったときの残念さが連想され、私は来てよかった。矢張弟は待つていたんだと強く感



露坐の大仏

じ、来年も必ず来るからと誓いました。また今年御家族の来なかった霊には来年はきつと来られるよと思めの言葉を心の中で呼びかけました。沢山の兵隊さんは、みんな若々しく元氣に見えました。

こうして祭式は終り、九段会館に移り、総会では役員の方々は万場一致で重任議決、引つづき又々御難儀なされることでありませうが、何分よろしくお願いするものであります。予算、決算も何の異議もなく進行し、副碑建設につきましては会員で第一石材工業の社長の内海さんの献身的な御協力のおかげには感激の至りでした。

どうか一日も早く完成していただきたいものです。控室や食堂では隣席の方々等で語り合い、北は北海道、南は沖縄までの全く一面識もない方々であ

るのに、何か相通ずるところあつてか、初対面と思へぬ親近感を感じ打解けて、語り合い、百年の知己の感がするのにも本会の美点だと思います。午食席上向い側の席の方は、島の水が無く、苦勞したみたまたのために遠くからわざわざ清らかな霊水を沢山運んで靖国神社本殿の霊前に供えて下さった元英島の軍医長成宮さんでした。英霊はどんなに喜んだことでしょうか。又隣席の方は発会以来毎年参拝に來られているという御婦人でした。

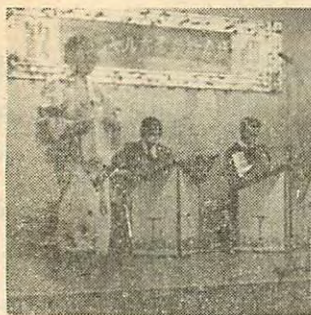
私一昨年九段会館に同宿したのは富山、島根、大阪の方々に、富山といえは葉、島根といえは出雲大社、私は千紀の大事業といわれ八郎瀧干拓を開かれ、不勉強な私は困ったりし、大阪の方は、米國では万博に必ず月の石を持って来て、展示するといつてるそうだな



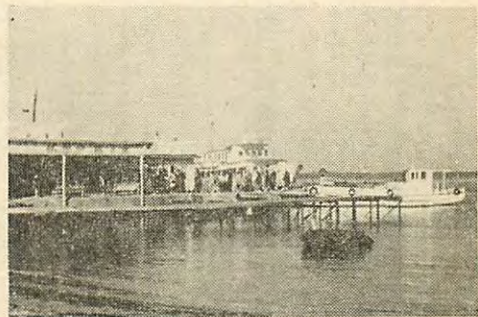
鎌倉八幡宮

ど話し、当時はみんな、半ば、疑問的に話し合ったが、それが実現され、万博最高ともいうべき人気がなったのも、よい思い出です。直会旅行会も出発時は、鎌倉へ下車できるかどうか、時間の見通しがなかったようでしたが、それが露座の大仏、鎌倉八幡両方共参拜できました。これも英霊が導いてくれたのだ。折角来たんだから、自分達が案内参拜させるよとこれも嘗って、国から横須賀へ面会に来た家族を鎌倉方面に案内したことが追想させられました。城ヶ島温泉ホテルでの懇親会は又楽しく、各地方自慢の郷土民謡やら、それぞれの隠芸など出て、時間の経つのも忘れませんでした。

最近どこにも何々会、何々団体と旅行会がありますが、本会は全国からの参加団体で、他に例のないのしさがあります。加えてホテル支配人の本会に御賛同下され、特に欲待下されたことは本当に有難うございました。翌日は早朝から東方遙かに太平洋の水平線を眺め、あの先にマールシャル諸島そしてギルバート諸島



ホテルでの隠芸



油壺棧橋

のあることが思われ、たしか行き来しているであろう浜の海水に触れて見ました。一同揃っての朝食も親しみを深めるばかりでした。城ヶ島灯台の側を通り、埠頭から油壺行の連絡船にのりました。城ヶ島の外を一周したので一時は太平洋に出たわけですが、幸い風もなく、波もなく英霊のお導きとここでも感謝をいたしました。油壺マリナーの魚類の多いこと、さすが「魚の国」といわれるわけだと昔きました。売店の店先に美事に育った三浦大根の陳列は印象的でした。続いてバスは三浦半島の東海岸を北上し、防衛大学に案内されました。学生諸氏のあのキビキビした態度や生活振りをみて、市中で男女の区別さへ解からぬ若者を見る時、国の前途に不安を感じる私、矢張り日本国

第七期決算報告書

至自昭和45年12月31日

マーシャル方面遺族会

収入の部

科 目	予算(円)	決算(円)
前期よりの繰越金	二〇五、七九	二〇五、七九
会費収入(45年度分)	七五、〇〇〇	七五、〇〇〇
会費収入(46年度分預り)	一九六、〇〇〇	一九六、〇〇〇
会費収入(47年度分預り)	一、〇〇〇	一、〇〇〇
寄附金等	一、〇〇〇、〇〇〇	六九、四二四
受取利息	五、〇〇〇	六、六五
雑収入	一〇〇、〇〇〇	六、八五〇
預り金	一〇〇、〇〇〇	七、四〇〇
借入金		四〇〇、〇〇〇
合 計	三、九三五、七九	四、二二一、五八

支出の部

科 目	予算(円)	決算(円)
慰霊費	六〇、〇〇〇	五九、六〇〇
運営費	一、〇〇〇、〇〇〇	八三三、五九九
刊行費	三〇〇、〇〇〇	二六四、四五四
印刷費	四〇〇、〇〇〇	一一一、九九
通信費	一〇〇、〇〇〇	八、九六
事務所用料	一四〇、〇〇〇	一三三、四四〇
振替払込料	六〇、〇〇〇	二九、九五
事務用品費	四〇、〇〇〇	七、八八
会議費	三三、〇〇〇	二、七〇
雑費	一〇、七九	八、七〇
子備費	一、四〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
現地慰霊碑維持基金	一、五〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
合 計	三、九三五、七九	三、〇七三、〇九五
次期への繰越金		一、〇九二、四四
現 金		四、五〇一
普通預金(富士、祐天寺支店)		三九、〇〇六
定期預金		五〇〇、〇〇〇
振替貯金		二五、九四

財産目録

科 目	金額
次期への繰越金	一、〇九二、四四
現地慰霊碑維持基金特別勘定(定期預金)富士、祐天寺支店	一、五〇〇、〇〇〇
資 産	二、五九二、四四
負債	四〇〇、〇〇〇
借入金	四〇〇、〇〇〇
負債 小 計	四〇〇、〇〇〇
差引正味財産(昭45・12・31現在)	二、一九二、四四

以上監事の監査を経て御報告致します。

昭和46年2月6日

第八期(昭和46年度) 予算

科 目	予 算(円)
昭和45年度よりの繰越金	一、〇三九、四九三
会費収入(昭46年度分)	五五四、〇〇〇
寄附金等	一、〇〇〇、〇〇〇
受取利息	七〇、〇〇〇
雑収入	五〇、〇〇〇
合 計	二、七一三、四九三
支出の部	
慰霊費	八〇、〇〇〇
運営費	一、〇〇〇、〇〇〇
刊行費	三〇〇、〇〇〇
印刷費	四〇〇、〇〇〇
通信費	一〇〇、〇〇〇
事務所用料	一四〇、〇〇〇
振替払込料	六〇、〇〇〇
事務用品費	四〇、〇〇〇
会議費	三三、〇〇〇
雑費	一〇、七九
子備費	一、四〇、〇〇〇
現地慰霊碑維持基金	一、五〇〇、〇〇〇
合 計	二、七一三、四九三







◇鹿児島県

- 一〇〇〇 妻 池田 トミ
- 〃 母 杉田ヨシノ
- 〃 姉 高山チサ子
- 五〇〇 母 荒田キクノ
- 〃 父 岩切 利平
- 〃 妻 児玉 チン
- 〃 母 土工アグリ
- 〃 父 西 敬二

- 二五〇〇 長男 和田 芳久
- 二〇〇〇 妻 丹村 静枝
- 一〇〇〇 父 遠藤 栄吉
- 〃 妻 黒岩キミエ
- 五〇〇 母 石走チヨマツ
- 〃 母 小野 サト
- 〃 妻 川畑ツルエ
- 〃 父 田口 清助
- 〃 父 塗木寛兵衛
- 〃 長女 前田 広子

◇沖繩県

- 一七八二 父 名嘉山全財

事務局だより

○新篤志会員の紹介

一、木下 甫様  
 本会創立当時大変お世話下さった林幸市前第六根拠地隊参謀の前任者としてクエゼリン島で御活躍なさった方ですが、当時の上司、隊員の冥福を祈られてやまず、二月六日の慰霊祭には遠路福井県から御参列下され、本誌にも屢々御寄稿下さっております。

この度本会篤志会員として御指導いただきたい旨御願ひ致しました処、御快諾いただきましたので御委嘱いたしました。

二、藤平直忠様

本号7頁の「タラワ、マキン玉砕英霊を弔う」の御寄稿を下された方でありますが、御自序とおあり、両島で前後一年有餘従軍され、玉砕一ヶ月前に転勤となり玉砕を免れました。以後後に残した戦友のことが脳裡を取らず、近く厚生省が同方面の遺骨採取のことを仄聞し、案内役を申し出られました。しかし国内役にも対外的にも諸種の規制があつて、実現困難の由です。このため今後は慰霊祭或は環礁を通し、戦友を慰め、御遺族に奉仕したい熱意に燃えておられます。本会の篤志会員として、御力添え願ひましたところ御快諾を得ましたので御委嘱致しました。

○副碑に装着する銘石のお願い

副碑の製作は總會で決定されましたので本部は只今具体策を検討中です。本体、土台等については第一石材工業の内海社長さんが腹案をお持ちです。問題とは各島の銘石です。銘石の名は環礁13号でそれぞれ知事さんからいただいた石名のとおりです。ついでには今度は小さくもあり、県から頂戴するわけにもまいりません。今回は各島の会員の方にお願ひできません。どうか、県内で御連絡なくお送りいただくとも困ります。そこで、個も集つても困ります。そこで、あなたか音頭をとっていただいで、御世話いただけましたら幸せてございませぬ。

遺慮なく申し上げれば縦、横25ミリ、厚さ15ミリに仕上げているだければ申分ありませんが、若しその加工がむづかしいようでしたら

ら内海社長さんが私がお引受けしますとさえ仰云つて下さっていますので、この寸法のものがとれる石塊を送っていただければ結構です。

○戦史叢書の紹介

最近、正しい戦史を知りたいとか、どこどこ地区の戦争日曆を調べたいがどうしたらわかるか等たんだん具体的のことを承知された方が増えて来ているようです。戦記ものの単行本にはやや興味あるものもあつて確否の度が判りません。防衛庁戦史室で刊行している戦史叢書が最も詳細に正確に記載されてあるようです。

全刊九十余冊で今日現在43冊目まで発行されています。第一回の配本は昭和41年8月でマレー進攻作戦つづいて41年には4冊、42年以後は毎年9冊程度の発行で現在43冊になっています。この中主として本会関係の既刊書は

- 第6回 中部太平洋陸軍作戦(1)
  - 第13回 同 (2)
  - 第38回 中部太平洋海軍作戦(1)
  - 第39回 同 (2)
  - 第40回 同 (3)
  - 第41回 同 (4)
  - 第42回 同 (5)
  - 第43回 同 (6)
- 5月までの戦史でありますので、本会関係では陸軍関係のことは判りますが、海軍関係の17年6月以後のことは、この叢書はまだ出ておりません。
- 価格は34冊目までは二二〇〇円ですが、その後は二九〇〇円です。各巻とも買切制です。店頭には出ていないと思います。本会の場合陸軍作戦は二冊とも、二二〇〇円、海軍作戦は二九〇〇円です。現在発行所(朝雲新聞

社)に在庫にあるかどうか知りませんが、もし御希望の方がいらっしゃらば本部でお取次します。

また浮田副会長は第一回配本から全巻購入しておりますので、本部事務室にそろうてあります。御覧になりたい方は本部においで下さいませ。御案内致します。なお叢書に記載されてあります限り御承知になりたいことは写して差上げますので御申越下さい。

○明年二月六日の直会旅行予定

昨年は伊豆修善寺に、本年は城ヶ島に、そして、その前後は貸切バスで水入らずに本当になごやかな直会旅行が行なわれました。また明年も是非計画するようにわざわざ手紙で望まれる方さえあります。担当の佐藤常任幹事、岡野幹事大変張り切つて寄り寄り計画を進めておられるようです。それによりますと、佐藤さん、岡野さんの外に佐竹さん、末広さんなどお世話役となり、充分ご満足いただきましたと張切っております。

大体の行先は千葉県、そして旅館は、太平洋に面した外房州の太海、料理自慢のよしのや旅館というのに既に連絡をつけたとか聞きました。詳しくは前記世話役の方からお知らせすることと思ひます。慰霊祭は例年どおり十時三十分開始の予定です。

○直会旅行参加員一同から寄贈

本年をもって第二回を迎えた直会旅行も佐藤常任幹事はじめ本部役員及び参加員の方々の意気相投じ誠になごやかに行われるように

なりました。その結果もあつて、今年も直会旅行費清算の結果、余剰金を生じました。これが処分につきお伺ひ致しましたところ、皆さん世話役に一任とのことで、佐藤常任幹事から全額三、五四六円本会に寄附されました。会員一同に代り旅行参加者の暖かい御心持に対し厚く御礼申上げます。

○本会名簿完成のお知らせ

かねてから多数会員の御要望のありました本会の名簿本年二月完成し慰霊祭に参加された方は全員その他にも御申込みにより発送いたしました。はがきによる御註文が一〇〇〇冊になりましたので送料七五円でございませぬ。登載員数三一〇〇余名、一五〇頁。まだ在庫があり、捌けませんとそのまま本会基金の欠損となつてしまひますので多数御購入下さいますよう御申込みをお待ちいたします。

○振替用紙

今回は振替用紙同封しませんでした。会費その他送金上必要の方ははがきで御申越下さい。すぐお送り致します。

本部

郵便番号一五四  
 東京都世田谷区野沢  
 三丁目十一番三号  
 マーシャル方面遺族会  
 電話(東京)三三三六四番